

2017/10/7

二四四 羹あつものに懲こりて壺なますを吹くべからず。禍を恐れて酒を廃すべからず。欲を窒ふさぎて情を滅ぼすべからず。

不可懲羹而吹壺也、不可恐禍而廢酒也、不可窒欲而滅情也、

【訳】熱い吸い物を吸ったのにこりて、冷たいなますを吹いてから食べるようなことをしてはいけない。酒での失敗を恐れて酒をやめるようなことをしてはいけない。欲望を抑えて人情をなくしてはいけない。

二四五 二南の詩、二雅の什、往ゆくとして人情にあらざるはなく。往ゆくとして天理にあらざるはなし。

二南之詩、二雅之什、無往而非人情也、無往而非天理也、

【訳】詩経の（周南と召南の詩）小雅と大雅の詩の行き着くところは、人情や天理でないものはない。

二四六 是の故に古人云はずや、「以つて観るべく、以つて群すべく、以つて怨むべし。これを邇ちかくすれば父に事つかへ、これを遠くすれば君に事つかふ」と。又云ふ、「詩書は、義の府なり」と。

是故古人不云乎、可以觀、可以群、可以怨、邇之事父、遠之事君、又云、詩書、義之府也、

【訳】そうであるから孔子が「詩経を学ぶことによって、人情風俗を観察し、人々とやわらぎ楽しみ、やわらかく怨みの情を述べることができる。近くは家にいて親に仕え、遠くしては君に仕える」と言っている。又古人は「詩経と書経には、人のふみ行うべき道義がたくさん説かれている」とも言っている。

二四七 「大学」の正心誠意、劉子の説、実に易ふべからず。而して物は、即ち物に本末有るの物。知は即ち先後する所を知り、本を知るの知。而していはゆる至れるとは、本を知るを除くの外、別に致すべきなし。而るに王淮南を以つて正と為すものも、亦信すべきに似たり。其れ然り而して後、「大学」「中庸」統紀一般にして、俱ともに慎独を以つて究竟の功夫と為すは、余深く其の卓見に服す。

大學正心誠意、劉子之説、實不可易、而物、即物有本末之物、知、即知所先後、知本之知、而所謂至者、除知本之外、別無可致矣、而以王淮南爲正者、亦似可信矣、其然而後、大學中庸統紀一般、而俱以慎獨爲

「究竟功夫」者、余深服「其卓見」矣、

【訳】大学でいう「正心誠意（その身を修めんと欲する者は、まずその心を正しくす。その心を正しくせんと欲する者は、まずその意を誠にす）についての劉念臺の説は他の説に取り換えることのできるものではない。格物致知の「物」は、物事には本質と枝葉があるの「物」。「知」は先にすべきことと後にすることを知るの「知」。そして「至れる」とは、本質を知ることであって、それ以外のことは何もない。そうであるのに王心齋の考えが正しいというのは、私の信じている説と似かよっているからだ。そうして始めて「大学」と「中庸」の根本精神は同じであり、どちらも「慎独」が究極の工夫であるとしており、私はその卓見に従うものである。

二四八 徒らに他人の悠悠の是非を評論して、枉げて自己の惜しむべきの歳月を過ぎ了る。

徒評論他人悠々之是非、枉過了自己可惜之歲月、

【訳】他人がのんびりと、正しい、正しくないと論ずるのを、批評して、自分の大切な歳月をまげて過ぎしてしまっている。

二四九 一陰一陽これを道と謂ふ、程朱の説、精ならざるにあらざるなり。然り而して此れいはゆるこれを言ひて便ち逗漏を成すもの。

一陰一陽之謂道、程朱之説非不精也、然而此所謂言之便成逗漏者、

【訳】周易にいう「あるいは陰となり、あるいは陽となつて無窮の変化を繰り返す働き、これを道という」について、程朱（程顥・程頤・朱熹）の説は詳しい。しかしながら、このことを言つて、大切なところを落とし漏らしている。

二五〇 曲礼に曰く、「父母存すれば、友を許すに死を以つてせず」と。自ら是れ戦国以後の人の語。

曲禮曰、父母存、不許友以死、自是戰國以後人之語、

【訳】曲礼では「父母が存命であれば、友の難儀に助太刀し、命をかける約束をしてはならない」と言っている。おそらく戦国時代以降の考え方である。

二五一 世間有数の人に為らんと欲す。而るに乃ち自ら其の勤苦を厭ふや。

欲_レ爲_二世間有數之人、而乃自厭_二其勤苦_一乎、

【訳】世間に有数の人物になりたいと願っている。そうであるなら、自ら進んでそのための骨折りや苦しみを嫌がつてはいけない。

二五二 凡そ学ぶものは以つて自己の身心を成就_{じやうじゆ}するのみ。人の好く看ると好く看ざるとには関せざるなり。かくのごとく志を立つる、此れを眞実_{おのれため}己の爲の学と謂ふ。

凡學者以成_二就自己身心_一而已矣、不_レ關_二人之好看、不_レ好看_一也、如_レ是立志、此謂_二眞實爲_レ己之學_一、

【訳】そもそも、学問をするということは、自己の身心を完成させることだけである。他人によく見られようが、よく見られまいがそんなことにはこだわらなくてよい。このように志をたてるものであり、これを眞実自分のための学問という。

二五三 予常に思へらく、天下の事、立たざるゆゑんものは、未だ必ずしも其の才の足らざるを患_{うれ}へず、惟_{ただ}志あるの人なきを患_{うれ}ふるのみ。苟_{いやし}くも志あるの人あらば、則ち鶴鳴き子和するがごとく、賢能並び進みて、以つて天下の奇策を竭_つくして遺_いなかるべし。而して天下何事か立たざらんと。

予常思、天下之事所以不_レ立者、未_二必患_二其才之不足、而惟患_二無_二有_レ志之人、苟有_レ志之人_一乎、即鶴鳴子和、賢能竝進、可_レ以竭_二天下之奇策_一而無_レ遺_レ矣、而天下何事不_レ立、

【訳】私は常に思っている。世の中がうまく成り立っていないのは、まだその才能のある人がないことではない。その志がある人がないのを心配しているのだ。山の中で鶴が鳴けばその声は遠く天にまで達するという。すくなくとも、志のある人が山中にいてもそれを聞く君子まで届くのだ。賢くて才能がある人が、すぐれた策をすれば間違いはない。そして世の中がよくなるということだ。

二五四 子曰く、「貧にして楽しむ」と。則ち是れ貧を以つて累_{るい}と為さざるなり。又曰く、「天下を有_{たも}つや。而して与らず」と。則ち是れ富を以つて心と為さざるなり。已_{すで}に貧を以つて累と為さず、又富を以つて心と為さ

ざれば、則ち壁立萬仞、清風千古、推倒すべからず、汚蔑すべからず。あ
あ古人の操、何ぞ其れ奇特なる。

子曰、貧而樂、則是不_レ以_レ貧爲_レ累也、又曰、有_二天下_一也、而不_レ與焉、則是
不_二以_レ富爲_レ心也、已不_二以_レ貧爲_レ累、而又_二不_二以_レ富爲_レ心、則壁立萬仞、清
風千古、不_レ可_二推倒_一、不_レ可_二汚蔑_一、嗟乎古人之操、何其奇特也、

【訳】孔子は論語の中で、「質素な生活の中にも楽しみがある」と言われている。
このことは、これは貧しいことをわずらいと考えないことである。又、こうも言
われている。「天下の富を所有している人がある。しかし、そんなことは人にま
かせて、自分は直接には関与しない」と。これは富貴に心奪われることのないこ
とを意味したのである。貧をわずらいと考えず、富に心を奪われることがなけれ
ば、巖石が高くそびえ立っているように、清らかな風が絶えず吹き渡っているよ
うに、人を押し倒したり、恥ずかしめたりすることはできない。ああ、昔の人の
節操はなんとすばらしいことか。

二五五 凡そ人の人たるゆゑんを論ずるものは、則ち孝と曰い、悌と曰う。
此れ人生の何等の大節目ぞ。而るに吾人平生、骨肉同胞、少しく悖逆に遭
えば、輒ち是非計較の機あり。惕然として自省せざるべからざるなり。

凡論_二人之所_一以爲_レ人者、則曰_二孝_一、曰_二悌_一、此人生何等大節目、而吾人平生骨
肉同胞、少遭_二悖逆_一、輒有_二是非計較之機_一、不_レ可_二不_レ惕然自省_一也、

【訳】人が人である理由は、親を大事にしたり、兄弟仲よくしたりすることであ
る。これは人の生き方としてとても大切なことである。そうであるのに、私は平
生、妻や子が少しでも道理にかなわないようなことをすると、その度にいいか悪
いかを自分で決めて、責めている。振り返って、おそれ慎んで反省せずにはおれ
ない。

二五六 早く起きて端坐すれば、胷中廓清の意なくんばあらず。書を読
み道を論ずれば、志氣奮発の効なくんばあらず。既にして気機乗除し、懶
惰相継ぎ、私慾沸騰するも、復た顧慮せざるは、方外の人のはゆる直、
首を斬り兩段と作し、方に自身奴賊の物たるを知るを待つものなり。

早起端坐、不_レ無_二胷中廓清之意_一、讀書論道、不_レ無_二志氣奮發之效_一、既而
氣機乗除懶惰相繼、私慾沸騰、不_二復顧慮_一、方外人所謂直待_二斬首作_二兩
段_一、方知_二自身奴賊_一物者也、

【訳】朝早く起きてきちんと坐れば、必ず胸中につかえているものを取り除かれた気持ちになり、必ず氣力を奮い起こすか効果を生じるものだ。書物を読み、道を議論すれば、やる氣や氣力も出てくる。その後、氣が空回りしたり、怠惰の気持ちが出てきたり、自分の欲がわき出してくるのを、反省しない者は仏教で言うところの「首を真つ二つに斬り、まさに自分が奴賊であることを知る」のを待っているようなものであるう。

二五七 我れ竊かに熟此の世界を観るに、乃ち吾が道場たり。而して其の間の順逆好醜、患難憂苦の、凡そ泣くべく笑ふべく、恐るべく驚くべきものは、皆吾の心を盪滌し吾の性を鍊磨する所以のものにあらざるなきなり。則ち丈夫たるものは、心屈すべからず、氣阻むべからず、必ず当に其の脊梁を強くし、出頭擔當して、以って遠く到らんことを期すべし。

我竊熟觀此世界、乃爲吾之道場、而其間順逆好醜、患難憂苦、凡可泣可笑、可恐可驚者、皆莫非所以盪滌吾之心、鍊磨吾之性者也、則爲丈夫者、心不可屈、氣不可阻、必也當強其脊梁、出頭擔當、以期遠到也、

【訳】私が自分なりに、自分の住んでいる世界のことを考えてみると、それは私の道場なのである。この世の中の順境や逆境、美しいことや醜いこと、憂えることとや苦難の様々なことで、泣くこと笑うこと、恐れること驚くことなどは、みんな私の心の汚れを除き清めてくれ、私の氣性精神を鍛えてくれるものであるのだ。一人前の人たるものは、心が折れてはだめだ。気持ちがあくじけてはならない。必ず背骨を強くし、頭角を出し責任を負う人になり、(背すじを伸ばし、先頭になり任務を引き受け)やがて将来立派な人格になることをなし遂げよ。

二五八 丈夫は志なければ則ち已む。苟くも志あらば、則ち正に當に磊磊落落、光明俊偉、以って不朽の図を為すべし。而れども胸中却って卑瑣齷齪、鷓鴣の腐鼠を懷しむときは、豈に恥づべきの甚しきにあらずや。

丈夫無志則已、苟有志、則正當磊々落落、光明俊偉、以爲不朽之圖、而胸中却卑瑣齷齪、如鷓鴣之懷腐鼠者、豈非可恥之甚耶、

【訳】一人前の人は、志を持たなければおしまいだ。志さえあるなら、まさに、小事にこだわらず潔白な広い心で朽ちることのない足跡を残せるだろう。しかし、その胸中が姑息で(フクロウがネズミの死肉に執着するように)くだらないことにとらわれているようなら、それは恥じるべきことだ。

二五九 今日、我の、故人に棄てられざるゆゑんは、其の稍志操あるに似たるを以つてなり。然らざれば、則ち世間には我の書を読む技量のごとき、車載斗量、其の人乏しからず。則ち我の、故人に報ゆるゆゑんのもの、要は其のいはゆる似たる者を化して以つて真と為すにあるのみ。況んや此処に一徹し、然る後始めて以つて学問の道を言ふべきものをや。

今日我之所_レ以不_レ棄_二於故人_一者、以其稍似_レ有_二志操_一也、不然、則世間如_二我之讀_レ書伎倆_一、車載斗量、不_レ乏_二其人_一、則我之所_レ以報_二於故人_一者、要在_レ化_二其所_一謂似者、以爲_レ眞而已矣、況乎此處一徹、然後始可_レ以言_二學問之道_一者乎、

【訳】今、私が旧友に見捨てられないのは、志を持ち続けているからだ。そうではない。世間には私が書物を読む力ぐらいの人はくさんいて、そういう人はすくなくない。すなわち、私がかつての旧友に報いるわけは、読書などができる人たちに、真実の教えを究め伝えるだけだ。ここにうちこんこそ、それが学問の道だといわなければならない。

二六〇 心楽しければ、則ち糗^{ほしい}を飯^くひ草を茹^くふも、亦以つて身を終ふべし。心苦しければ、則ち金門玉堂、錦茵彫^{きんいんちようき}几も、曾^{すなわ}ち以つて吾が一睡^くを著^くくるに足らず。而して苦樂の境は、常に此の心より参究せざれば、胡乱^{こらん}奔走、顛倒迷惑^{てんとうめいぼく}し遂に以つて返るを知らず。ああ哀しいかな。

心樂、則飯糗茹_二草_一、亦可_二以終_レ身_一、心苦、則金門玉堂、錦茵彫_二几_一、曾_レ不_レ足_二以著_二吾一睡_一、而苦樂之境、常不_レ從_二此心_一参究、胡乱奔走、顛倒迷惑、遂以不_レ知返、嗚乎哀哉、

【訳】心がたのしければ、干した飯をくい、草を食べても、それで人生を終えることできる。心が苦しければ黄金で飾った門と美しい宮殿に住み、錦の敷物と彫り飾られたひじかけに坐つていてもぐすり眠ることもできない。苦樂の境は、常に真理を探究しなければ、みだりに走りおもむき、さかさまになつて迷ひ苦樂の境の見分けがつかなくなり、ついには本来の自分自身を見失つてしまう。ああ、なげかわしいことだ。

二六一 安分の二字、千古聖賢の学、此に尽く。

安分二字、千古聖賢之學、盡乎此矣、

【訳】安分（自己の本分に安ずる）の二字は、千古の聖賢の学問の道である。人が学問の道に励む理由はこの二字に尽きる。

二六二 一片の堅苦の心腸、百世不磨の基業。

一片堅苦の心腸、百世不磨の基業、

【訳】志を一つにして心身を苦しめ励み努める心は、いつまでも朽ちない学問の根本である。

二六三 心は淡ならんと欲し、志は専ならんと欲し、気は鋭ならんと欲す。而れども世間の種種の緊要なきの技芸は、却って皆拙ならんと欲す。

心欲淡、志欲専、氣欲鋭、而世間種々沒緊要之技藝、却皆欲拙、

【訳】心は淡泊でありたい。志に向ってひたすらでありたい。意気ごみは強く激しくありたい。しかし世間にある色々な差し迫って必要のない歌舞・音曲などの芸能は、どれも皆上手でないことを望む。

(2018/2/3) 264

二六四 毎日須く父母の生鞠拊育の恩を思量すべし。此の念提起一番すれば、随つて自愛の心生ず。然らば則ち体膚を毀たず、躬行を虧かず、匪類と交らわず、醜穢に堕ちず、戦戦兢兢として、此の身を保全するは、亦勢の必ず至る所なり、これぞ是れ人子の第一件にして、喫緊肝要の事目なり。

毎日須く思量父母生鞠拊育之恩、此念提起一番、隨生自愛之心、然則不毀體膚、不虧躬行、不交匪類、不堕醜穢、戦々兢兢、保全此身者、亦勢之所必至、這是人子第一件喫緊肝要之事目、

【訳】毎日、父母から受けた生み育ててもらった恩、可愛がってもらった恩を思い出さなければならぬ。この思いを一番にすれば、自分を大事にする心が生じる。そうすると身体を傷つけず、自分を大切にする実践を欠かさず、悪い仲間とは交わらず、醜くて汚らわしい状態にならず、畏れ慎んでこの身を大事にしていけば力を発揮することができる。この事は、人の子としてのあるべきことの中で最も大切なことである。

二六五 吾が輩、限りあるの生を以つて限りなきの書籍に従事す。固より自^{みづか}ら其の歳月の給する能はざるを知るなり。因りて謂^{おも}へらく「大凡事を記すの書、天下の治乱安危に關^{かか}はらざるものは、則ち敢へてこれを読まず。理を明かにするの書は、學術の汚隆明晦^{おりゆうめいかい}に係^{かか}はらざるものは、則ち敢へてこれを読まず」と。かくのごとく志を立てて、埋頭^{まいとう}理會せば、則ち天下古今有用の欠くべからざるの書は、其の、讀過一周するを得るに庶幾^{ちか}からん。

吾輩以^レ有^レ限之生、而從^レ事於無^レ限之書籍、固自知^レ其歲月之不^レ能^レ給也、因謂大凡記^レ事之書、不^レ關^レ乎天下之治亂安危^一者、則不^レ敢讀^レ之、明^レ理之書、不^レ係^レ乎學術之汚隆明晦^一者、則不^レ敢讀^レ之、如^レ此立志、埋頭理會、則天下古今有用不^レ可^レ缺^レ之書、庶幾其得^レ讀過一周^一矣、

【訳】私は、限りある命で限りなくある書物を読むことを仕事にしている。書物を読むのに十分な歳月がないことは分かっている。だから、次のように考えている。「できごとなどを書いている書物で、天下の治まりや乱れ、安全、危険に関わらないものは読まない」と。このように志を立て、没頭していけば、世の中の大事な書物はおよそ読めるだろう。

二六六 少壯^{しょうそう}已に過ぎ、脱然として益^{ます}声華の念を厭^{いと}ふ。老大漸^{ろうだい}く迫り、惕然^{てきぜん}として深く結果の功を思ふ。

少壯已過、脱然益厭^レ聲華之念、老大漸迫、惕然深思^レ結果之功、

【訳】若くて元気いっぱい頃は過ぎて、さっぱりとして、ますます名誉を求める気持ちがなくなってきた。しだいに老が迫ってきて、しみじみとやって来たことはこれでよかったかと反省している。

二六七 夫子の一貫^{いつくわん}、曾子の一唯^{いちみ}、これぞ是れいはゆる心を以つて心を伝ふるの様子なり。

夫子之一貫、曾子之一唯、這是所謂以^レ心傳^レ心之様子、

【訳】孔子が「自分は常に一つの道（忠恕）思いやり、のこと」を貫いているのだ」と言い、曾子は「はい。その通りでございます」と答えた。これこそ、心で心を伝えているということなのだ。

二六八 凡そ士たるものは志を立つるを貴とぶ。志立ちて人品材略、規模の大小高下、皆これに従ふ。

凡爲士者貴立志、志立而人品材略、規模之大小高下、皆從之矣、

【訳】立派だと言える人は志を立てることを大事にしている。志が立つと、人間の品格、才能、人物の器の大小高下などこれによって決まってくる。

二六九 道義に志すものは、声名の為に動かず。声名に志すものは、富貴の為に動かず。富貴に志すものは、卑汚苟賤に至らざる所なきなり。

志於道義者、不爲聲名動、志於聲名者、不爲富貴動、志於富貴者、卑汚苟賤無所不至也、

【訳】人としての道を大事にして志す者は、名声のために行動しない。名声を志すものは、富を得るためには行動しない。富を志すものは、為すことすべてが卑しく汚いものとなる。

二七〇 吾人試みに自ら思ふ、「平生志す所、果して何くに在りや」と。聖と為り賢と為り、君子と為り小人と為らんとす。惟其の志す所、志定りて成らざるものは、未だこれ有らざるなり。

吾人試自思、平生所志、果何在哉、爲聖爲賢、爲君子爲小人、惟其所志、志定而不成者、未之有也、

【訳】私は自分のことについて思うことがある。「平生志しているところは、果たして何をめざしているのだろうか」。聖人か賢人か、立派な人か平凡な人か、などと。志さえ決まれば、成せないことはないはずだが。

二七一 今日の人、敢へて自ら富貴に志すとは謂はず。然れども其の平日運用爲する所のもの、識者一覽すれば、自ら掩ふべからざるものあり。

豈に恥ずべきの甚しきにあらずや。

今日之人、不_レ敢自謂_レ志_二於富貴_一、然而其平日之所_二運用營爲_一者、識者一覽、自有_二不_レ可_レ掩者_一、豈非_二可_レ恥之甚_一乎

【訳】この頃の人、あえて自らは富貴に志すとは言わない。しかし、日頃の行いや営みを、分かる人が見れば、覆い隠せるものではない。まことに恥ずかしいことではないか。

二七二 吾人、平日読書の間、毎_二に古人の至性高義、峻節懿行_一を觀る。則ち這の裏_二に自ら欽慕愛悦_一、沛然として遏止すべからざるの意あり。夫れ其の然るゆゑんのは、良心善性固より内に具はり、内に具はる所と外に觀る所と、感激觸発し、融液滋潤すればなり。其の妙以つて口に喩ふべからず。

吾人平日讀書之間、每觀_二古人之至性高義、峻節懿行_一、則這裏自有_二欽慕愛悦、沛然不_レ可_レ遏止_一之意、夫其所_二以然_一者、良心善性固具_二於内、内之所具_一、與_二外之所觀_一、感激觸發、融液滋潤、其妙不_レ可_レ以喩_二於口_一矣、

【訳】私が普段読書をしている時は、常に古人のこの上なく善良な性質と立派な徳義や、高い節操と立派な行いを見ている。この内には、おのずと敬い慕い、愛し悦び、雨が盛んに降るように止めることのできないような思いがある。そういう思いになる訳は、良心や善性はもと心の中に備わっているものであり、心の内に備わっているところと、外に現れるところが、感じ触れて発し、溶けて潤うからである。その妙味は言葉にして表すことはできないものである。

二七三 是の故に孟子曰く、「理義の我が心を悦ばすは、猶ほ芻豢の我が口を悦ばすがごとしと。然らば則ち芻豢の味を悦ばざるものは、口の正しきを失へるなり。理義の旨を悦ばざるものは、心の正しきを失へるなり。」

是故孟子曰、理義之悦_二我心_一、猶_二芻豢之悦_二我口_一、然則不_レ悦_二芻豢之味_一者、失_二口之正_一也、不_レ悦_二理義之旨_一者、失_二心之正_一也、

【訳】このようなことから孟子は言われる、「理義（道理と正義）がわが心を悦ばすは、猶ほ芻豢（すうかん（牛羊や犬豚））の我が口を悦ばすがごとし」と。したがって肉類を食べる美味しさ忘れたものは、口が正常でなくなっている。理義の意味を喜んで受け入れないものは、心が正常でなくなっている。

二七四 口其の正しきを失ふも、其の害は尚ほ小。心其の正しきを失へば、其の害大なり。此れを以つて身を処せば、則ち喜怒常なく、此れを以つて家に当れば、則ち好惡僻戾^{へきれい}し、これを以つて国に臨めば、則ち刑賞潜濫^{せんらん}し、往くとして悖^{もと}り且つ乱れざるなきなり。

口失^二其正^一、其害尚小、心失^二其正^一、其害大矣、以^レ此處^レ身、則喜怒無^レ常、以^レ此當^レ家、則好惡僻戾、以^レ此臨^レ國、則刑賞潛濫、無^二不^一往而悖且亂^二也

【訳】口の感覚が正常でなくなっても、その害は小さなものである。心が正常でなくなれば、その害は大きなことになる。心の正常を失って行動すれば、心は揺らぐ。こんな状態で家のことをやればたちまち善し悪しがたより、こんな状態で国事に当たればたちまち刑罰と報賞を誤り、先行きは行いが道に外れることになる。

(20180407)

二七五 故に心を存するは正しきを貴^{たふ}とび、培養は深きを貴ぶ。功夫は熟するを貴ぶ。古人の孜孜汲汲として勤めて倦まざるゆゑなり。

故存^レ心貴^レ正、培養貴^レ深、功夫貴^レ熟、古人之所^二以孜孜汲々勤而不^レ倦也^一、

【訳】したがって心は常に正しくあることを重んじ、心の養いはより深くを重んじ、実践努力は精一杯することを重んじる。昔の聖人は、これを怠ることなく一心につとめ励み、勤めて怠けなかったわけがここにある。

二七六 凡そ人主たるものは、一挙動一政令も、慎しまざるべからず。況んや天下の人心向背離合の際に於てをや。

凡爲^二人主者^一、一舉動一政令、不^レ可^レ不^レ慎、況於^二天下人心向背離合之際^一者乎、

【訳】だから君主たるものは、立ち振る舞いや政令に対して過ちや軽はずみなことがないようにしなければならない。まして、世の多くの人々の考えや気持ち、従うか背くかというような時においてはなおさらである。

二七七 昔、魏鄭公、創業と守成とを論じ、以つて守成は創業よりも難しと為すは、蓋し為にするありて言ふ。其の実は則ち創業の難きこと、固より守成の比すべきにあらざるなり。

昔者魏鄭公、論創業與守成、以爲守成難於創業者、蓋有爲而言、其實則創業之難、固非守成之可比也、

【訳】魏の鄭公は建国の基礎をつくることとその制度を維持することについて論じ、国を維持することは国をつくるより難しいとするは、まさしく意図するところがあつて言っているのだ。実際は国をつくることの難しさは、国を維持することと比べものにならない。

二七八 後世の人主は、創業の難きを知らず、祖宗の心を体せず。宴安偷惰、是非を恤へず、邪正を弁へず、举措顛倒し、刑賞舛錯し、紀綱法度は一切廢弛し、以つて覆滅の禍を致すもの滔滔として皆是れなり。欺くに勝ふべけんや。

後世人主、不知創業之難、不體祖宗之心、宴安偷惰、不恤是非、不辨邪正、舉措顛倒、刑賞舛錯、紀綱法度一切廢弛、以致覆滅之禍者、滔滔皆是、可勝歎哉、

【訳】後世の君主は、建国の基礎を創る難しさを知らないため、建国の祖の考えや気持ちを中心にとどめて行動しない。酒におぼれ遊び怠けて、正しいかどうかを気にかけず、不正と正との区分をしない。人材の登用がきちんと行われず、刑罰・褒章を誤り、制度や規則等の決まり事が一切すたれ緩むことによつて、国が滅亡するという不幸な結果に至り、滅亡にむかつていく様子は、皆こういったことによるものである。非常に嘆かわしいことである。

二七九 人の生まるるや直し。今これを身に反りみるに、是を見れば則ち以つて是と為し、非を見れば則ち以つて非と為し、敢へて毫髪も自ら欺くこと容さず。古人の言、我を誣ひざるなり。

人之生也直、今反之於身、見是則以爲是、見非則以爲非、不敢容毫髮自欺、古人之言不我誣也、

【訳】人は生まれながらにして、正しく真つ直ぐである。今このことをわが身にあてはめて考えてみる。正しいことを見れば、正しいとし、偽りは偽りとし、あ

やまちはあやまちとし、些細なことでも自分をごまかすことを許さない。古人（孟子）の言葉は、私を誤らせない。

二八〇 是より根を立て、養ひて害はず、其の極に至れば、則ち至大至剛、宇宙に充塞す。夫の世を経め民を済ひ、綱常を維持し、激烈、悲壯、驚天動地の事業のごときは、皆是れ此の氣これを為すなり。

自是立根、養而不害、至其極也、則至大至剛、充塞宇宙、若夫經世濟民、維持綱常、激烈悲壯、驚天動地の事業、皆是此氣爲之也、

【訳】ここに生き方の根本を置きそれを育み、正しく成長させてその極限に至れば、不屈の道徳的勇氣―「浩然の氣」は、この上大きく強いものになってあらゆるところに充滿する。世の中を治め人々を救済し、三綱五常の徳を維持し、また世間を驚かせる強烈な力の限りの業績といったものは、みなこの「浩然の氣」によつてなされてるものなのだ。

二八一 これを養ふの道は如何。曰く自ら反りみて縮し。曰く義を集む。曰く行ひ心に慊し。蓋し行ひ、心に慊ければ、則ち事、義に合す。事、義に合すれば、則ち縮きを期せずして縮し。而していはゆる浩然の体段は、この裏に自ら禦ぐべからざるものあり。

養之之道如何、曰自反而縮、曰集義、曰行慊乎心、蓋行慊乎心、則事合於義、事合於義、則不期縮而縮、而所謂浩然之體段者、這裏自有不可禦者一矣、

【訳】これを育てるのは、どうしたらよいのだろう。自ら反省して真つ直ぐに正す。また、たくさんの義積み重ねる。また、行いは心に快いことをする。行いが心に快ければ、することは義になつている。義にかなえば、正しいことを願わなくても、正しいことができる。孟子の「浩然の氣」は、このような仕組みになつており、自分で止めたりするようなものではない。

二八二 人は学ばざるべからざるなり。「小学」は則ち小益、「大学」は則ち大益なり。

人不學也、小學則小益、大學則大益

【訳】人は学ばなければならない。「小学」は、個人的な日常の具体的なことの教えであり、「大学」は、自分の修養や世の中のあり方まで述べたものだ。

二八三 心内に明かに、身外に修まり、父母其の孝を悦び、妻子其の慈を懷しみ、隣里郷党従ひて其の徳に服せざるはなし。而して家道は自然隆盛なり。此れぞ是れ学問上の実益。

心明_二於内_一、身修_二於外_一、父母悦_二其孝_一、妻子懷_二其慈_一、鄰里郷黨莫_レ不_二從而服_二其徳_一矣、而家道自然隆盛、此是學問上之實益、

【訳】心の内が明確になり、身も心も修まれば、父母はその孝を喜び、妻や子は自分たちを愛し慈しんでくれていることを嬉しいと感謝し、郷里の人たちは、誰もかれもその徳のあることに感服しないものはない。こうして家は自然に栄えていく。これこそが学問をしていく実益だ。

二八四 若し其れ是に反すれば、則ち父母これを怒り、妻子これを怨み、隣里郷党従ひてこれを非らざるはなし。而して家道も亦自然に衰替す。其の害復た見難きものなし。

若其反_レ是、則父母怒_レ之、妻子怨_レ之、鄰里郷黨莫_レ不_二從而非_レ之也、而家道亦自然衰替、其害無_二復難_一見者_一矣、

【訳】もしこれらの反対のことをすれば、父母はこれを怒り、妻と子もこれを怨み、郷里の人たちも非難しないものはないほどだ。そうして、家の行く末も自然に衰退する。その害は歴然としている。

(20180512) 285

二八五 是の故に我れ毎に吾子輩に向かひて、横説豎説すること、反覆丁寧、言語其の煩を覚え、時光其の久しきを厭はず、直父母の、子を視るがごときと一般なり。吾子輩幸はくは善く此の意を体せよ。

是故我毎向_二吾子輩_一、横説豎説、反覆丁寧、言語不_レ覺_二其煩_一、時光不_レ厭_二其久_一、直如_二父母之視_レ子一般_一、吾子輩幸善體_二此意_一、

【訳】だからこそ、私は常々あなたたちに向かっ煩わしさもいとわず強調して繰

り返して丁寧に、時間がたつのもかまわず教えているのは、父母がいやな顔をせず子を見るようなと同じだ。あなたたちは、どうかこの私の気持ちを分かってくれたい。

二八六 欲多ければ則ち身の重きを覚え、念多ければ則ち身の労するを覚ゆ。是の故に種種の嗜欲は頭頭抛捨し、種種の妄念は一切断棄すれば、則ち此の身は飄然として猶ほ脚を泥淖より抜きて高く雲霄の表に翔くるがごとし。

欲多則覺身重、念多則覺身勞、是故種々嗜欲頭頭抛捨、種々妄念一切断棄、則此身飄然猶拔脚泥淖而高翔乎雲霄之表、

【訳】欲が多いと体は重いような感じがするし、思うことが多ければ体が疲れる気がする。だから、耳・目・口・鼻などの欲は、一切なげ捨て、いろいろな迷いの心を、一切立ちきれば、この体は欲事にこだわらず、足を泥沼から抜いて、大空高く駆けめぐるような軽い状態になるものだ。

二八七 これを天上の月に譬ふれば、雲蔽へば則ち光を失ひ、雲散ずれば則ち明復す。是の故に学問の道は寡欲より要なるはなし。

譬之天上之月、雲蔽則失光、雲散則明復、是故學問之道莫要於寡欲、

【訳】これを天上の月に例えれば、雲が覆うと光を失い、雲が散ればまた明るさが戻ってくる。だから、学問の道において、欲が少ないことほど大事なことはない。

二八八 夫れ士の志立ち識明らかにして、以つて其の身を持し、以つて其の業を成して、千古に朽ちざるもの、蓋し其の法を知らざるべからざるなり。

夫士之志立識明、以持其身、以成其業、而不朽乎千古者、蓋不可不知其法也、

【訳】学徳のある人の志が立ち、考えがはっきりとして、自分の身をもってその務めを成し遂げてそれが永遠に朽ちないのは、その方法をよく知っているからだ。

二八九 古、伯夷は殷の賢人なり。然り而して举世其の人を以つて狂と為すも、以つて禍を被らざるは幸ひなり。

古者伯夷殷之賢人也、然而舉世以其人爲狂、不以被禍者幸矣、

【訳】古く、伯夷は殷の賢人であつた。しかし、世の人は伯夷を狂人とみなしていたが、そのことで、禍を受けなかったのは幸いであつた。

二九〇 太公ありて後其の義を知る。孔子ありて後、其の仁を得て怨みなきを知る。孟子ありて後、以つて聖の清と爲し、又以つて百世の師と爲す。韓文公ありて後、以つて泰華も高しと爲すに足らず、日月も明と爲すに足らず、天地も容と爲すに足らずと爲すなり。

有太公而後知其義、有孔子而後知其得仁無怨、有孟子而後以爲聖之清、又以爲百世之師、有韓文公而後以爲泰華不足爲高、日月不足爲明、天地不足爲容也、

【訳】太公望によつて伯夷は後の世の人々に義人として知られるようになった。孔子が後に論語によつて、伯夷には仁があつて恨みがなかつたことをわからせた。孟子が出てから、伯夷は清廉潔白な代表として永遠の師となつた。韓文公が出てからは、高い山の代表の泰・華も伯夷の前では高くなく、日や月も伯夷の前では明るくなく、高大な天地も伯夷の前では高大さなどないぐらいだとした。

二九一 均しく是れ一人の身にして、当時狂にして後世賢なるにあらざるなり。知ると知らざるとのみ。

均是一人之身、非狂於當時、而賢於後世也、知與不知耳、

【訳】これらは一人の人のことで、その当時は狂人で、後になって賢人になった、というのではない。その人のことを知っているか知らないかだけなのだ。

二九二 これを知るもの、或ひはこれを九天の上に推すも、知らざるもの、或ひはこれを九地の下に墜す。是の故に古より志あるの士は、知己を重んじ、甚しきは則ちこれが為に死を致して悔いざるに至る。良に以あるかな。

知_レ是者、或推_二之於九天之上、而不_レ知者、或墜_二之於九地之下、是故從_レ古有_レ志之士、重_二於知己、甚則至_二爲_二之致死而不_レ悔、良有_レ以也夫、

【訳】これを知るものは、あるいはそれを天の最も高いところあると認めるが、そのことを知らないものは、それを極めて低いところにあるものと見下そうとする。だから、昔から志し有る人は、自分のことを知る人を大切にしてきた。はなはだしい場合には、そのために死んでも悔いなしというまてになる。まことに、もつともなことである。

二九三 人苟_も胡乱_に一世を過ぎ_{たらんと}欲せば、則ち復た此の学を事とするなし。然らずして上、皇天を戴き、下、后土を履み、巍然として自命して人なりと曰はんと欲せば、則ち此の一段の用功を缺くべからず。

人苟欲_二胡亂過_二了一世、則無_二復事_二此學、不_レ然而欲_上戴_二皇天、下履_二后土、巍然自命曰_レ人、則不_レ可_レ缺_二此一段用功_一、

【訳】人は少なくとも、いいかげんに一生を過ぎようすると、この学問を自分の事として専念する必要はない。そうでなくて、上に大いなる天を戴き、下には土地の神に身をおき、ぬきんでて偉大にして自分から人なりと言わしめたいと望むなら、この学問に一段と努力を欠くことはできない。

二九四 功を用うれば則ち人と為り靈と為り、功を用いざれば則ち禽と為り獸と為る。乃ち這の裏より自ら趣舍を択び、以つて其の志を立てざれば、則ち真に是れ一庸儒の小人のみ。(二九四)

用_レ功則爲_レ人爲_レ靈、不_レ用_レ功則爲_レ禽爲_レ獸、乃不_下從_二這裏_二自擇_二趣舍、以立_中其志_上、則眞は一庸儒之小人耳、

【訳】学問に努めれば、人は人となり、精神の根源となるものも得られさらにりっぱな人にもなることができる。学問をおろそかにすれば、鳥や獸と同じようなことになってしまう。どのようなになるか、自分で選択して、その志を立てないと、ただの平凡で軟弱なつまらない人になってしまうだけだ。

(20180602) 295

二九五 人の功を用ふるや、果敢なるを要し、強忍なるを要す。果敢にあらざれば則ち以つて其の決を助くるなく、強忍にあらざれば則ち以つて其の勤に勝ふるなし。

既に已に果敢にして又強忍ならば、庶幾か、其の遠業の成就を望むべきに。

人之用功也、要果敢、要強忍、非果敢則無以助其決、非強忍則無以勝其勤、即已果敢而又強忍、庶幾其可望遠業成就乎、

【訳】人が学問に努めるには決断力が必要であり、また忍耐強さが必要である。決断力がないと決意がにぶり、忍耐力がないと一所懸命励むことはできない。決断力があり忍耐力があれば、偉業を達成することも期待できる。

二九六 今の学を為さんと欲するものは、曾ち此等の用功ありや否や、宜なるかな悠々悒悒、淪胥沈溺し、草木と同じく朽ちて、後に伝はるなきこと。

今之欲爲學者、曾有此等之用功乎否、宜哉悠々悒悒、淪胥沈溺、草木同朽、而無傳於後也、

【訳】今、学問を身につけようとしている者は、この決断力や忍耐強さがあるだろうか。悠々としてのんびりだらしくなく、怠けているのであれば、後世に名を残すようなことがないのは当然のことだ。

二九七 人、其の父に事へて不孝ならば、則ち家に容れられず、其の君に事へて不忠なれば、則ち朝に容れられず、衆人と交はりて信ぜられざれば、則ち世に容れられず。書に曰く、「自ら作せる讐ひは追るべからず」と。豈に信ぜざらんや。

人事其父不孝、則不容於家、事其君不忠、則不容於朝、與衆人交不信、則不容於世、書曰、自作讐不可追、豈不信乎、

【訳】人は父に子として孝行しなければ家に受け入れられない。仕える君主に忠義でなければ朝廷に受け入れられない。周りの人との付き合いの中で信頼がなければ世の中に受け入れられない。書経に述べられているように「自分自身が作る禍は逃れることができない」というのは、信じずにはおれないではないか。

二九八 天下国家の治乱安危は、人心の向背に在り。而して人心の向背は、政令の其の宜しきを得ると否とに在るのみ。

天下國家之治亂安危、在人心之向背、而人心之向背、在政令之得其宜與否而已、

【訳】天下国家が治まるか乱れるかは、人の心が上に立つ人に従っていくか背い

ていくかにかかっている。そして、人の心の従うか背くかは、政治の決まりが妥当かどうかにかかっている。

二九九 古人のいはゆる「欲する所はこれを与へこれを聚む、惡む所は施すこと勿かれ」とは、政を為すの道、かくのごとくに過ぎず。

古人所謂所欲與之聚之、所惡勿施者、爲政之道、不過如此、

【訳】 古人（孟子）が言っている「人が要望する事を与え、嫌がるものは施さないように」とは、政治を行う要であり、このようなものに過ぎない。

三〇〇 丙寅冬十一月十二日、雪降り天寒きとき、一婦人あり、兒を負ひて食を乞ふ。蓋し其の夫、明を失ひ以つて生を為すなく、因つて相ひ俱に乞丐し以つて日を度るものなり。家人起きて食を与ふれば、則ち背兒、色喜び、夫婦従いて拝謝す。予これを聞きて覺えず惻然として心を傷む。

丙寅冬十一月十二日、雪降天寒、有一婦人、負兒而乞食、蓋其夫失明無以爲生、因相俱乞丐以度日者也、家人起而與食、則背兒色喜、夫婦從而拜謝、予聞之、不覺惻然而傷心、

【訳】 慶応二年、冬十一月十二日、雪が降る寒い日、一人の婦人が子供を背負つて食を乞いに来た。恐らく夫は失明しており生計を営むことができないのである。そのために二人して物乞いをして日を送っているであろう。妻が起きて食を与えると、背中に負われた子どもは大変喜び、夫婦も共に感謝しお礼を述べた。私はこのことを聞いて思わず悲しみで心を痛めた。

三〇一 吾儕、家にありて炉を擁し茵に坐し、以つて寒氣を防ぐ。而れども彼は則ち雪天に行歩し、前に仰ぐべきの食なく、後に帰るべきの家なし。泥塗に蹙蹙し、手足凍冷、斃れて死すを以つて幸と為す、嗟乎一に何ぞ其の窮まりて此に至るや。

吾儕在家擁爐坐茵、以防寒氣、而彼則雪天行步、前無可仰之食、後無可歸之家、泥塗蹙蹙、手足凍冷、以斃而死爲幸、嗟乎一何其窮之至此、

【訳】 私たちは、家にいて囲炉裏があり、敷物にすわって、寒さを防いでいる。しかし、あの人たちは、雪の中を歩いて道を行き、その先に食べ物はなく、戻っても帰るべき家もない。ぬかるんだ道に歩みを妨げられ、手足は冷たく凍り、倒れて死ねばまだいい方だとしている。ああ、一体どうしてこんなことになったのだろうか。

三〇二 人は乃ち多情を貴ぶ。いはゆる多情とは男女の私褻の謂にあらずして、貧賤艱難、人生の痛痒に、輒ち能く心を動かすの謂なり。

人乃貴_二多情_一、所謂多情非_二男女私褻之謂_一、而貧賤艱難、人生痛痒、輒能動_レ心之謂也、

【訳】人は情が深いことが大事だ。情が深いとは、男女のひそかに慣れ親しむことというのではなく、貧しく苦勞している人や人生の痛みに苦しんでいる人に、よく心を動かすということだ。

三〇三 人は能く多情にして、然る後以つて鰥寡孤独の苦しみを察すべく、以つて生民安危の情を体すべく、以つて四海を宅扱潤して大業を建つべし。

人能多情、然後可_二以察_一鰥寡孤独之苦_一矣、可_二以體_一生民安危之情_一矣、可_二以澤_一潤四海_一而建_二大業_一矣、

【訳】人は情があつて、独り身の孤独の苦しみを察し、世の中の人の安危が身をもつて分かり、それでもつて、世の中を潤すという偉大な仕事成し遂げられるというものだ。

三〇四 経を治むるは固より学ぶ者の本務たり。而して史も亦読まざるべからざるなり。

治_レ經固爲_二學者本務_一、而史亦不_レ可_レ不_レ讀也、

【訳】經書を勉強することは、学ぶ者の根本的な大事なことだ。そして、歴史書も当然読まなければならない

三〇五 予毎に史を読む。古人の曠度偉量、峻節奇行を見るに、未だ嘗つて喟然として嘆き、勃然として興らずんばあらず。倏忽の頃に、襟懷頓に別る。

予每讀_レ史、看_二古人之曠度偉量、峻節奇行_一、未_二嘗不_一喟然而嘆、勃然而興、倏忽之頃、襟懷頓別、

【訳】私はいつも史書を読む。古人の広く大きい度量や心の広さ、高い節操での行爲を見ると、ため息が出てたちまちのうちに心が引きしまり、たちまちのうちに氣もちがあらたまらないことはない。

三〇六 平日卑瑣齷齪の念、一時に氷消霧積し、直将に家を棄て国の為にし、妻孥を忘れ蒼生を恤み、苟くも為すべきの路あらば、則ち経営驅馳し、力を竭くして尽瘁し、敢へて難を辞せざらんとするなり。

平日卑瑣齷齪之念、一時氷消霧釋、直將棄家爲國、忘妻孥恤蒼生、苟有可爲之路、則經營驅馳、竭力盡瘁、不敢辭難也、

【訳】平素のこせこせした思いは、一度に消えて、すぐに家を捨てて国のために働き、妻子を忘れて人のためにすることがあれば、計画をめぐらして行い、人のために奔走し、力を尽くして努力し、あえて困難なことでも避けようとはしない気持ちになる。

(20180804)307

三〇七 治と道を同じくすれば、則ち治まらざるなく、乱と事を同じくすれば、則ち乱れざるなし。治乱興亡の理は、和漢の別なく、古今の異なし。殷鑒炯炯、事を執るものの最も当に戒むべき所なり。

與治同道、則莫不_レ治、與亂同事、則莫不_レ亂、治亂興亡之理、無_二和漢之別、無_二古今之異、殷鑒炯々、執事者之所_二最當_レ戒也、

【訳】よい政治を行えば、世の中が治まらないことはない。乱れたことと同じことをすれば世の中は乱れる。世の中が治まることと乱れる事の道理は、日本や中国に違いはなく、昔も今も同じだ。国を治めるのに戒めとすべきことは、遠い時代にあるのでなく少し前の過去に在る。このことは、世の中の物事を取り仕切る者が最も戒めとしなければならないことである。

三〇八 孔子、「春秋」を作り、三伝迭ひに起る。惟「左氏」のみ未だ全くは夫子の旨を得たるものと為さず、然り而して「左氏」を舍きては、復たともに春秋を言うべきものなし。「公」「穀」のごときは則ち特これに付会するのみ。

孔子作春秋、三傳迭起、惟左氏未_レ爲_二全得_二夫子之旨_一者、然而舍_二左氏_一、無_二復可_二與言_二春秋_一矣、如_二公穀_一則特附_二會之_一耳、

【訳】孔子が「春秋」を編集し、その後「左氏伝」「公羊伝」「穀梁伝」の三伝が代わる代わる作られた。ただ「左氏伝」だけは全く孔子の意図するものを全てくみ取っているとはされていない。しかし、そんなことから、「左氏伝」以外の二書は「春秋」と言えるものではない。「公羊伝」「穀梁伝」のごときは無理に

理屈をつけたものに過ぎない。

三〇九 古来「左氏」を以つて丘明きゅうめいと為す。然れども「論語」に就きてこれを見れば、則ち丘明は夫子の先輩たり。而らば却つて「春秋」の為に伝を作るの理なし、其れ誣しふること亦甚し。

古來以「左氏」爲「丘明」、然就「論語」見之、則丘明爲「夫子之先輩」、而無「却爲」「春秋」作「傳之理」、其誣亦甚矣、

【訳】 昔より「左氏伝」は左丘明の編集だと言われている。しかし、「論語」に書かれていることから見れば、丘明は孔子の先輩である。そうなれば孔子の「春秋」のために、解説を作る道理はない。ありもしないことを事実のように言っている。

三一〇 「左伝」は編年の祖たり。「史記」は紀伝の祖たり。此の二史のごときは、実に宇宙間の史家の創体なり。

左傳爲「編年之祖」、史記爲「紀傳之祖」、如此二史、實宇宙間史家之創體、

【訳】 「左氏伝」は、史実を年月の順を追って書く「編年体」の初めてのものである。「史記」は、天子の伝記と臣下の伝記を主にして書く「紀伝体」の初めてのものである。この二つの歴史書は、歴史上においてそれぞれ初めて作られた書体の歴史書である。

三一一 当時王わう沢未だ亡ほろびずして、士大夫の間、猶ほ典刑あり。周旋馳騁ちてい、言論風旨も、亦以つて人の意を起すに足るものあり。

當時王澤未亡、而士大夫之間、猶有「典刑」、周旋馳騁、言論風旨、亦有「足」以起「人意」者矣、

【訳】 春秋時代当時、王の善政はまだ滅んでおらず、官職の間では、まだまだ昔からの掟や法・手本が基本であった。立ち居る舞いや物事への取り組みの態度、そして言葉使いや身なり、考え方なども人をそのような気持ちにさせるには十分であった。

三一二 良史の筆を以つて、当時の事を載す。鋪敘容与ほじょようよ、結構秀整、煥然

として画のごとし。実に亦宇宙間、史家第一の高手なり。

以_二良史之筆、載_一當時之事、鋪敘容與、結構秀整、煥然如_レ畫、實亦宇宙間史家第一之高手、

【訳】すぐれた歴史書がよい書き手でもって、当時の事が書かれている。その記述は、ゆったりととらわれることなく、文体の組立も見事に整っており、絵画を見るようにあざやかだ。実にこれもまた、歴史上初めて作り出された史家を第一とする最高の手法だ。

三一三 綱常倫理は、国の元氣なり。元氣盛んなれば則ち肢体に傷害ありといへども、身は未だ死するに至らず。倫理明かなれば則ち辺境に虞_{おそ}れありといへども、国は猶ほ保つべし。

綱常倫理、國之元氣、元氣盛則雖_二支體有_一傷害、而身未_レ至死、倫理明則雖_二邊境有_一虞、而國猶可保、

【訳】人としてのあり方や生き方（綱常倫理）が、国のあり方の根本である。例えば、根本の氣力が盛んであれば、手足や体に傷があっても、身は死なない。同じように人の生き方が明らかであれば、たとえあちこちで何かもめごとが起っても、国はそのまま存続している。

三一四 今、西洋の説を為すものは、其の本を講ぜずして、其の末に従事す。則ち技術は精なりといへども、器械は巧みなりといへども、然れども倫理暗く元氣衰へて、国能く存し身能く保つものは、未だこれあらざるなり。

今爲_二西洋之説_一者、不_レ講_二其本_一、而從_二事其末_一、則技術雖_レ精、器械雖_レ巧、然倫理暗元氣衰、而國能存身能保者、未_二之有_一也、

【訳】今、西洋の考えを説く者は、国のあり方の根本を問題にしないで、その末端の所にとらわれている。つまり、技術は精巧とか、機械は巧妙とか言っても、人の生き方についてはあいまいであり、氣力も衰えていて、国を存続させ、それをいつまでも保持していくことはないであらう。

三一五 是の故に国を治むるものは、綱常より重きはなく、倫理より先なるはなし。上は此れを以つて君徳を輔_{たす}け、下は此れを以つて士風を励ます。

而して夫の西洋の技術のごときは、彼の長を取り、我の短を補ひ、以つて防禦の一端を備ふれば可なり。

是故治國者、莫重於綱常、莫先於倫理、上以此輔君德、下以此厲士風、而如夫西洋之技術、取彼之長、補我之短、以備防禦之一端可也、

【訳】だから、国を治めるということは、人の正しい生き方や道德より大事なものは無い。上に立つ者はこれでもって君主をたすけ、下のものはこれで士氣をあげる。そして、西洋の技術は、そのよいところを取り入れ、わが国の短所をそれで補い、国を守る一端に備えればよい。

三一六 人情は常を忽せにし奇を好み、故きを厭ひ新しきを喜ぶ。国体士氣靡然として潜かに冥冥のに移る。知らず異日何等の世界と作るかを。予毎に中夜これを思ひ、長嘆に勝へず。

「人情忽常好奇、厭故喜新、國體士氣靡然潛移乎冥々之際、不知異日作何等之世界、予每中夜思之、不勝長嘆、」

【訳】人の心というのは、日常のいつも変わらないことを軽々しくみて、目先の変わった珍しいことを好み、古いことをいやがり、目新しいことを喜ぶ。国柄というのは、草木が風になびくようになびき従い、ひそかに人の目につかないうちに移り変わっている。将来、どのような世の中になるか、私にはわからない。私は、このことをいつも夜中になると思い、嘆かずにはいられない。

(20180901) 317

三一七 凡そ士為る者は、先づ其の品を立つるを以つて要と為す。夫の材力技芸のごときは、特其の余事のみ。

凡爲士者、先以立其品爲要、若夫材力技藝、特其餘事也、

【訳】人として一人前であるためには、まず立派な人格を作ることが肝要である。能力があることや技術を持っていることなどは、余分なことである。

三三八 士の其の品を立つるは如何。名の為に激せず、利の為に汚されず、声色嗜慾の為に溷らず。其れ然り而して後、士の品立つ。

士之立其品者如何、不爲名激、不爲利汚、不爲聲色嗜慾溷、其然而後

士之品立矣、

【訳】一人前であるということは、どういうことであらうか。名声をあげるために感情的にならず、利益のために手を汚さず、音楽、女色、感覚的欲望などで自分を汚さない。そのようなことに気をつけた後で、一人前になる品格は備わってくる。

三一九 士の品一たび立てば、則ちこれを人の天衢^{てんく}に昇るに譬ふ。其れをして材なく学なからしむるも、然れども已に塵氛^{じんぷん}中の人にあらざるなり。況んや又材と学とあり、以つて其の志を濟^なさば、則ち家國天下の事、復^{また}た為し難きものなからん。

士之品一立、則譬^な之於人之昇^あ天衢^{てんく}、使^し其無^な材無^な學、然而已非^な塵氛中人^{じんぷん中人}也、況又有^な材與^と學、以濟^を其志、則家國天下之事、無^な復^{また}難^が爲者^{なるもの}矣、

【訳】一人前になろうとする人の品格がいったんできあがれば、それは天の路に昇ることと同じだ。そうなれば、能力や学がなくても、すでに俗人の仲間ではない。ましてや、すぐれた能力や学が備わっていて、志があるなら、天下国家のことを立派に成し遂げることができる。

三二〇 予竊^{ひそか}に志あるも、成す能はざるなり。歲月浸尋^{しんじん}し、老醜^{らうし}日に現れ、行^{ゆく}草木と同じく漸^{しぜん}尽^{じん}泯滅^{みんめつ}せんとすること、実に慨歎^{がいたん}すべし。

予竊^{ひそか}有^を志、而不^な能^な成也、歲月浸尋^{しんじん}、老醜^{らうし}日現、行^{ゆく}與^と草木^{さうもく}同漸^{しぜん}盡^{じん}泯滅^{みんめつ}者、實可^た慨歎^{がいたん}、

【訳】私も心中には志は持っていたが、それを成し遂げることとはできていない。歲月は次第に過ぎてゆき、老醜は日ごとに現れ、やがては草木と同じように命つき滅びていくのは、実に慨嘆せずにはいられないことだ。

三二一 聖人も亦人のみ。其の体たる、眇然^{べうぜん}たる五尺の大に過ぎず。而るに精神志氣の、運用營爲^{ようえい}する所のもの、磅礴^{はうはく}として宇宙に充滿す。是^{こゝ}を以つて天の覆ふ所、地の載する所、凡そ血氣^{ちそ}を有するの屬^{もろ}、尊親^{そんしん}せざるなし。

聖人亦人耳、其爲體不^な過^を眇然五尺之大、而精神志氣之所^{しよ}運用營爲^{ようえい}者、磅礴^{はうはく}充滿於宇宙、是以天之所^{しよ}覆^ふ、地之所^{しよ}載^{する}、凡有^た血氣^{ちそ}之屬^{もろ}、莫^な不^な尊親^{そんしん}、

【訳】聖人もまた一人の人間である。その体は小さく一メートル半程の大きさでしかない。しかし、倫理・道に志す精神が働き、人としてのありよう、その営み事は、広大で限りなく天地宇宙空間に広がり充滿している。この事は天地すべてにおいて、血氣盛ん意氣揚々とした仲間同志同輩は、互いに尊びあい親しくせずにはおれない。

三三二 吾の生まるるや、其の初め亦以つて聖人と異なるなし。然り而して私心の蔽ふ所と為り、物欲の拘る所と為り。一膜として外視し以つて他と為す。而して心たるゆゑんのもの、区区たる口腹耳目の間より出でず、其れ聖人を去ること啻に天淵のみならず。

吾之生、其初亦無_二以異_一於聖人、然而爲_二私心所蔽_一、爲_二物欲所拘_一、一膜而外視以爲_レ他、而所_二以爲_レ心者、不_レ出_二乎區々口腹耳目之間_一、其去_二聖人_一不_二啻天淵_一、

【訳】私が生まれた時、その初めは聖人と何等異なることはなかった。しかし、自分の利益になることばかりにとらわれ、物欲にもとらわれ、漠然と外から見て、これを生まれつきだと考えている。そして、心はとるに足らない飲食のことや音楽を聞いたりはやかななものを見たりすることから、抜け出せないでいる。聖人から遠ざかっていくのは、天と地がかけ離れていく以上のことだ。

三三三 人は惟一心のみ、苟くも識りてこれを養へば、則ち彼のごときの大に至る。識らずしてこれを蔽へば、則ちかくのごときの小を到す、学問の、貴ぶべきと為すゆゑんなり。

人惟一心、苟識而養_レ之、則至_二如_一彼之大、不_レ識而蔽_レ之、則到_二如_一此之小、
學問之所_二以爲_レ可_レ貴也、

【訳】人はただ心が大事である。もしこのことを理解し、発展させるなら、聖人のような大きな人物となるであろう。また、わからないままにしていると小さな人物に過ぎなくなる。学問の尊い理由がここにある。

三三四 学の貴ぶべきやかくのごとし。而るに举世滔滔として、風靡波蕩し、一人の、肯へて頭を回らし此の道に向かふものなし。噫亦嘆くべし。

學之可_レ貴也如_レ此、而舉世滔滔、風靡波蕩、無_レ一人肯_二回_一頭向_二此道_一者、噫亦可_レ嘆矣、

【訳】学問を貴ぶ理由はこのようなことにある。しかし世をあげて風が草をなびかせるように流されてしまっている。一人としてふり返って学問の道を究めようとする者がいない。ああ嘆かわしいことである。

三二五 学問の優劣勝負は、甚だ分弁し難し。彼の校技角力者の一日験し易きがごときにあらざるなり。

學問之優劣勝負、甚難ニ分辨、非_レ如_二彼校技角力者之一日易_一験也、

【訳】学問の優劣勝負は、はなはだ見分けが難しい。技を比べ力を比べる者をすぐに見きわめるようにはいかない。

三二六 然り而してこれをして首を聚めて膝を接し、書に対して義を講じ、筆を執りて辞を占せしめば、則ち其の遅速敏鈍、固より亦識り難きことあらざるむ。

然而使_二之聚_一首接_レ膝、對_レ書講_レ義、執_レ筆占_レ辭、則其遅速敏鈍、固亦不_レ難_一識也、

【訳】そうして優劣を決めるのにみんな寄り集まって、書物に向かってその意味を述べたり、筆を執って言葉を書いたりすれば、それらに速いか遅いかは知るの

は難しいことではない。

三二七 抑此れぞ是れ枝葉上の事、夫の造詣の浅深、得力の厚薄、生熟真偽のごときは、則ち果して亦測識すべからざるものあり。

抑此是枝葉上之事、若夫造詣之淺深、得力之厚薄、生熟眞僞者、則果亦有_二不_一可_二測識_一者、

【訳】そもそも学問の優劣を決めることなど学問の本質から離れていて、ささいなことである。学問の理解が浅いか深いか、身につけた力が厚いか薄いのか、本物が偽物かなどは推し量ることはできないことだ。

三二八 苟くもこれを識らんと欲せば、則ち平生日用、人に接し事に応じ、言動起居し、作止語黙する、微しく其の所以を考ふれば、則ち存する所の

実、自ら掩おほふべからず。

苟欲識之、則平生日用接人應事、言動起居、作止語默、微考其所以、則所存之實、自不可掩矣、

【訳】とにかくこれを知ろうと思うなら、平素のくらしの中で人にどのように接しているか、物事をどのようにこなしているか、言動はどうか、立ち振る舞いはどうかなど、それらを少しでも見て考えれば、その人の学問が本当にできているかどうかなどは、自然に現れているものだ。

(2018106) 328

三二九 子思子は誠を以つて宗旨を標しめす。誠よりして三達徳、三達徳よりして五達道、五達道よりして、九経、然る後己を脩め人を治むれば、聖人の能事をば畢る。

子思子以誠標宗旨、自誠而三達徳、自三達徳而五達道、自五達道、而九経、然後脩己治人、聖人之能事畢矣、

【訳】孔子の孫、子思子は「誠」をもってその根本義とした。誠から「知、仁、勇」の三達徳に、三達徳から「君臣、父子、親子、兄弟、朋友」の五達道に、五達道から天下を治めるのに必要な「身を修める、賢者を尊ぶ、親しい者を愛する、大臣を敬う、臣下の考えを察する、庶民を愛する、職人を招き寄せる、遠くからやって来る人に思いをかける、諸侯を安心させること」の九経ができるようになること。そうして、己を修め人を治めれば、聖人としてするべきことは全部なし終えたことになる。

三三〇 誠は、即ち未発の中、而して三達徳、五達道、九経は、亦即ち既発の和なり。其の停停当、少しも偏倚するなきを以つての故にこれを中と謂ひ、其の至誠惻怛、物に触れて藹然として乖戾する所なきを以つての故にこれを和と謂ふ。

誠者、即未發之中、而三達徳・五達道・九経者、亦即既發之和、以其停々當々無少偏倚、故謂之中、以其至誠惻怛觸物藹然無所乖戾、故謂之和、

【訳】誠は喜怒哀楽などの感情の出てくる前の天から与えられた本性そのものである。三達徳、五達道、九経は感情が発しても節度があるもので和である。いまだ喜怒哀楽の感情が起こつておらず、少しも片寄っていない状態を中といい、まごころやいたみ悲しむ心などで様々な状況に触れても心が落ち着き、食い違

ことのない状態を和という。

三三一 中は即ち天命の性、而して和は即ち性に率^{したが}ふの道なり。性は即ち心の体、而して道は即ち心の用なり。体用一源、顕微間なし。然り而して体を以つて本と為し、微を以つて要と為す。

中者即天命之性、而和者即率^レ性之道、性者即心之體、而道者即心之用、體用一源、顯微無間、然而以^レ體爲^レ本、以^レ微爲^レ要、

【訳】中は、とりもおさず天の命令する本性であり、和は天の命令に従う道である。天の命令する本性は心の本体、そして天の命令する道は心の働きである。心の本体とその働きは、根本は一つで、少しの違いもない。しかしながら、心の本体を根本ととらえ、心のわずかな動きを必要とする。

三三二 是の故に曰く、「中は天下の大本なり。」と。「本」と云ふは、以つて要帰の在る所を示すなり。戒慎恐懼必ず是に於いてし、慎独必ず是に於いてす。其れ然り而して後、いはゆる「本立ちて道生ず」とは、「中庸」一篇の旨、かくのごときに過ぎず。

是故曰、中者天下之大本也、本云者以示^レ要歸之所^レ在也、戒慎恐懼必於^レ是、慎獨必於^レ是、其然而後、所謂本立而道生者、中庸一篇之旨、不^レ過^レ如此、

【訳】だから言われている、「中は世の中を治める大本・根本である」と。本というのは肝心かなめのことであり、何事もそこに帰着することを意味する。だから、誰も見ていないときこそ慎み、聞こえないところにも敬つて必ず行う。そして自ら慎しんで行う。そうして後に、論語で言っている「本立ちて道生ず」とは、中庸の一篇の要旨のことで、このことを言っているにすぎない。

三三三 「関雎」一篇、凡そ三章。首章は則ち文王夫婦の閨門の則を言ふ。是れ其の全なり。二章三章は則ち分析してこれを言ふ。二章は其の離れて相想ふを言ひ、三章は其の合して相樂しむを言ふ。いはゆる樂しみて淫ならず、哀しみて傷^{やぶ}らず、首章の意を反覆曲尽するゆゑなり。是れ皆其の已に夫婦たる上に就きて説く。女は未が嫁せざるの称にあらざるなり、寤寐^{ごび}反側、琴瑟鐘鼓は、宮中の人にあらざるなり。而していはゆる性情の正は、即ち文王夫婦の事にして、復た必ずしも独り后妃に因りて説を為さざるなり。

關雎一篇、凡三章、首章則言「文王夫婦閨門之則、是其全也、二章三章則分析而言之、二章言其離而相想、三章言其合而相樂、所謂樂而不淫、哀而不傷、所以反覆曲盡乎首章之意也、是皆就其已爲夫婦之上而說、女者非未嫁之稱也、寤寐反側、琴瑟鉦鼓者、非宮中之人、而所謂性情之正、即文王夫婦之事、而不復必獨因后妃爲說也、

【訳】「関雎」の一篇はおよそ三章である。首章は、文王夫妻の夫婦和合のあり方を述べている。そして、これが「関雎」のすべてだ。二章三章は首章の内容を分析して述べている。二章は離れていても互いに想い合うことを述べ、三章はともにいて相樂しむことを述べている。孔子の言う「楽しんでもおぼれず、哀しんでも度を過ぎない」という首章の意味するところを、反覆し表現を変えて詳しく述べているのである。これらは皆、すでに夫婦である者について説いている。未婚の女性について述べているのではない。また、「寤寐反側、琴瑟鉦鼓」（寢返りを繰り返す、琴や太鼓の合奏）の部分は宮中の人のことではない。そしていわゆる人徳の正しさは文王夫婦のことであって、必ずしも単に后妃（文王の妻）の徳のみを基にして述べられているものではない。

三三四 徳は養はざるべからざるなり。識は練らざるべからざるなり。徳、養はざれば、則ち以つて人の心を服するに足らず。識、練らざれば、則ち以つて事の宜を量りてこれに応ずるに足らず。

徳不可不養也、識不可不練也、徳不養、則不足以服人心矣、識不練、則不足以量事之宜而應之矣、

【訳】徳は、修養し身につけなければならない。見識は、励んで身につけなければならない。徳を修養して身につけなければ、人の心を感服させることはできない。見識を励んで身につけなければ、物事を判断し対応することができない。

三三五 徳は性に具はる、これを養ひて後高し。識は徳に基づく、これを練りて後明かなり。

徳具於性、養之而後高、識基於徳、練之而後明、

【訳】徳は、もともと人に備わっているものである。これを修養していけば人間性が高まる。見識は徳を基にしている。これが身につくように励んでいけば、世の中のことがはっきりとわかってくる。

三三六 識は徳に基^{もと}づき、徳は識に発す。是の故に徳高くして識益明^{ますます}かに、識明かにして徳益高^{ますます}し。如^もし或ひは徳に基^{もと}づくの識にあらざれば、則ち識は眞の識にあらざるなり。識に発するの徳にあらざれば、則ち徳は恐らくは其の至れるものにあらざらん。

識基^二於徳、徳發^二於識、是故徳高而識益明、識明而徳益高、如或非^二基^二於徳^一之識、則識非^二眞識^一也、非^二發^二於識^一之徳、則徳恐非^二其至者^一也、

【訳】見識は徳に基づくものであり、徳は見識によつて発せられるものである。そうしたわけで、徳が高ければ、見識はますます明らかに、見識が明らかになれば徳はますます高まっていく。もし徳に基づかない見識であれば、見識は眞のものではない。見識に基づかない徳ならば、その徳は恐らく最高のものではないだろう。

三三七 徳を養ふと曰ふは、経を読み義を講じ、優柔賢飫^{いうじうえんよ}、助けて長ずべからざるの謂なり。識を練ると曰ふは、史を閲し跡を考へ、前に見て、後に戒め、禍を未だ萌^{きざ}さざるに慮^{おもひ}り、福を将来に迎へ、以つて我が志を成すの謂なり。

徳曰^レ養者、讀^レ經講^レ義、優柔賢飫、不^レ可^二助而長^一之謂也、識曰^レ練者、閲^レ史考^レ跡、見^二於前、而戒^二於後、慮^二禍乎未萌、迎^二福乎將來、以成^二我志^一之謂也、

【訳】徳を修養するということは、経書を読み、人としての正しい道を考え、ゆつくりと学問して心ゆくまでその意義を味わつて修養していくことである。急いで一人前になろうとするようなことをしていけない。見識を練るということは、歴史書を読み、過去の足跡を考えて、将来を展望し、過去を戒めとし、禍が発生しないように思いをめぐらし、幸福を将来を迎えられるようにしていく。そのことによつて、自分の志が達成されるということである。